私の韓国語雑学辞典（その1）

堀内 稔

私が朝鮮語を学び始めて少したったころ、長璋吉『私の朝鮮語小辞典 ソウル遊学記』（北洋社、1973 年）という本が出た。非常におもしろく読んだ。韓国留学の体験や世相を、朝鮮語（言葉の観点からすれば韓国語だが、当時の日本では韓国語よりも朝鮮語が一般的だった）を取り入れて解説したものだった。

朝鮮語をハングルを使わずにカタカナだけで表現している。ほとんどの日本人が「ハングルって何？」という時代でしかたなかろうが、ともあれ本はよく売れ好評だったようだ。今でも「朝鮮本」の古典的な名著といえる。実際に本の中見を知らずタイトルだけで判断したのであろう。この本が辞典に分類されているのを見ておどろいたこともある。

私は最近、韓国ドラマをよく見ていて、そこから韓国語についての雑学的知識もかなり仕入れた。そこでこの雑学を、適宜コラム的に書いてみることにした。題名は長璋吉の名著にあやかった。

モンマルリョ（못 말려）

韓国ドラマなどでよく使われる言葉にモンマルリョ（못 말려)がある。直訳すると「止められない」という意味で、前後にチョンマル、チンチャ（정말,진짜＝ほんとに）といった強調がつくことも多い。ところで、この訳の字幕が実にバラバラである。これまで書き留めたものを紹介すると、次のとおりである。

困った人だ／いいかげんにして／かなわないな／勝手なんだから／あきれた／口先だけ／分かっていないな／しょうがない子ね／しつこい奴だ／やっておれない／つける薬が…／よくやるわ／分かった／変わっていないのね／あきれた／あんたって子は／どうしようもないわね／やれやれ／頑固なんだから／信じられない／ほんとに変わってるね、ついていけない／強情なんだから／お手上げだよ／やんなっちゃう／やめてよ／懲りない人ね……等々。

ニュアンスからしてなんとなくそれらしい訳ではあるが、一つの言葉でよくもこんなにバリエイションがつけられるもんだと感心する。もちろんドラマであるから、その場面に応じた適切な訳がつけられなければならないが、それにしてもである。文学作品などの翻訳では、こうした場面に応じたことばの選択
うまい、へたにつながるのであろう。

ところで最近見たドラマのなかで、腹をたてて戸をばたんと閉め部屋に入っていく場面の台詞でこの言葉が使われていた。字幕では「喉がかわいたわ」となっていた。「ほっといて」とか「いやになっちゃう」とかの台詞のほうが似合う場面なのに……。同じような発音のモンマルラ（목 말라＝喉がかわく）と混同したのだろうか。

ネロナンブル（내로남불）

長ったらしい固有名詞などを省略して使うのは、日本も韓国も同じであろう。ただ、日本より韓国の方が省略語というか新造語が多い、しかもおもしろいものが多いと感じるのは私だけだろうか。この「ネロナンブル」はこうしたおもしろい省略語のひとつである。

省略語はとりわけ若者の間で多く使われる。言葉をより短く簡単にして使いやすくしたり、仲間うちだけにお通じる隠語的要素を楽しむためだという。その多くは時代の流れとともに消え去るが、なかには一般化して広く定着するものもある。日本の「就

活」などはその例であろうか。一方韓国では、たとえば先生のことを学生たちセム（샘）と呼んでいるのを、ドラマなどでよく見かける。セムはソンセンニム（선생님＝先生)の省略語ではないかと思われるが、セム＝先生もかなり定着しているようだ。同じく초딩（チョディン＝小学生)、중딩（チュンディン＝中学生)、고딩（コディン＝高校生）といった卑語も、ドラマなどではよく使われる。

「ネロナンブル」は以前から知っていたが、最近『ハンギョレ新聞』の社説で「タプチョンノ」という省略語とともに使われているのをみつけた。社説に使われるのだから、かなり定着しているのであろう。

次のようなことばの省略語である。

내가 하면 로맨스 남이 하면 불륜.(ネガハミョン ロメンス ナミハミョン プルリュン＝自分がすればロマンス、他人がすれば不倫)

답은 전해져 있고 너는 대답만 하면되.（タブン チョネジョイッコ ノヌン テダプマン ハミョンデェ＝答えは決まっているから、返事だけをすればいい)

要するに非常に自己チュー的な考え方という意味と、答えは決まっている質問をわざとすることをあらわした省略語である。後者は放送の用語に由来するともいわれるが、ともあれいずれも社説に使われるぐらいであるから（後者は政治家のつまらない答弁を批判する形でつかわれていた)、ほぼ一般的に定着しているのであろう。こうした長い言葉を短く省略語にするのは韓国語の特徴であろうか。

かなり以前からあって、今もドラマなどで時折耳にする「トルシン」という省略語がある。トラオン シングル（돌아온 싱글＝もどってきたシングル）の省略語で、離婚した人を意味する。男ならトルシンナム、女ならトルシンニョという。なお、「トラオン シングル」は 2005 年に韓国 SBS で放映されたドラマでもある。

また、「チョッチャルサ」という省略語もある。チョッチマン チャル サウォッタ（졌지만 잘 싸웠다＝負けたけれどよく闘った）で、サッカーのワールドカップの韓国対ドイツ戦で有名になった言葉であるが、選挙戦で善戦したときなど、いまでもよく使われている。

最近の韓国ドラマに『イルタ・スキャンダル～恋は特訓コースで～』というのがある。イルタ(일타)とは一流スターの省略語で、普通はイルタカンサ（일타강사＝一流講師）すなわち塾や予備校、オンライン授業における人気講師として使われる。韓国の教育熱のすさまじさを垣間見せるドラマであり、それを象徴するような省略語であった。

キョンダンニョ（경단녀＝経断女）という省略語がある。成川彩『韓国映画･ドラマのなぜ？』にも取り上げられていたが、経歴断絶女性の略で結婚や出産･育児でキャリアを中断した女性を指す言葉である。「ロマンスは別冊付録」というドラマの紹介とともに経断女の再就職の難しさが指摘されていた。深刻化する韓国の少子高齢化（韓国語では低出産高齢化）の一因でもあろう。

メガド（맥아더）

アメリカの軍人、マッカーサー（Douglas MacArthur）のことである。韓国語を勉強している日本人がこの初めてこの単語に出合うとびっくりしてしまう。あまりにも日本語の発音と違っているので、ほんとに同じ人のこと？となる。しかしメガドの発音は、韓国語の外来語表記にきちんと対応しているのだ。

まず韓国語には長音がない。外国語の表記で長音になれた日本人にとって、長音のない韓国語は特異に感じられる。

マックはメック（맥）であり、これが次のアー（아）とひっつくとメガとなる。そしてtherのようにの最後の音が「ア行音+のばす音」の時にはオ（ㅓ）の母音となるから、発音はド（더）となって全体ではメガド（맥아더）となるのである。

少しややこしいが、たとえば The one（ザ ワン）はド ウォン、マザーはマド、ファーザーはパドになるといえば、少しはわかるだろうか。だからゴッドファーザーはガッパド（갓파더）、マザーテレサはマドテレサ（마더 테레사）となる。日本語の「ア」は韓国語の「オ」となり、逆に「オ」が「ア」となる場合が多い。コラムがカロム（칼럼）となるように。

そういえばかつてアルパゴル（알파걸＝アルファガール）という新造語もあった。かなり以前『韓国語ジャーナル』の記事で見たのだが、男性よりも能力の高い女性をあらわす語で、ギリシャ文字のアルファとガールをくっつけた言葉だという。

余談になるが、ギリシャは韓国語でグリッス（글릿스）だが、私が韓国語を勉強し始めたころは漢字表記の希臘をそのまま読んでヒラプ（희랍）といっていた。マイダス王の話を韓国語で読んだ時のことである。

ラケットはラケッ（라켓）だが、最後のッの部分が「ㅅ」で表される。したがって日本語の「ラケットが」を韓国語でいう場合、「ラケシ（라켓이）」となりめんくらう。ラケットやチケット、ターゲットのような外来語の場合、「ト」がよく「ㅅ」で表示される。この場合、会話文になったときに発音の変化が起きて、初めての聞いたときは「エッ！」となる。ホットラインがハンナイン（핫라인）となるのはその最たるものであろう。

北朝鮮での外来語の発音は韓国とはすこし違うようだ。ある脱北者の話によると、ワン、ツゥー、スリーの発音は、南では「ウォン、トゥ」となるが、北では「ワン、トゥ」で、ドクターは南では「ダクト」であるのに対し、北では「ドクタ」、マラソンは南では「マラトン」であるに対し北では「マラソン」と発音するらしい。

かつて『韓国語ジャーナル』で韓国から日本へ来たばかりの韓国人がマクドナルドがわからなかったり、日本人が韓国へ行ってハンバーガーを下さいといって通じなかったという記事が載っていた。外来語の発音にはご用心を、というわけだ。

ともあれ、初めてマド、パドと聞いて、「何？これ」とめんくらってしまったのは私だけだろうか。

ハムンチャサ（함흥차사）（四字熟語①）

鉄砲玉、すなわち行ったきり帰ってこないことをあらわす四字熟語で、漢字では咸興差使と書く。四字熟語を韓国語では四字成語（サジャソンオ）という。成語というのは中国語だそうで、四字熟語の多くは中国の故事をもとにしたているため、日本も韓国も同じものが多い。しかしこの咸興差使は咸興という地名からもわかるように韓国（朝鮮）独時のもので、李王朝初期の歴史が背景になっている。

咸興は朝鮮北部の咸興南道にある都市で、李朝の初代の王李成桂（イ ソンゲ）＝太祖が王子に譲位後にひきこもった。また、差使(チャサ)とは、国から重要な事を任されて送られる使臣のこと。3 代目の王に即位した 5 番目の王子（李芳遠）が、咸興の別宮にいる父、李成桂のもとに遣わした使臣を、李成桂は使臣が来るたびにこれを殺したり、監禁したりして帰さなかったことに由来する。なお、こうした事実は一部を除き伝説だともいわれる。

なぜこうした事態が起こったのか。そこには、有能で野心的な 5 男李芳遠（バンウォン）が、対立していた鄭道伝らの重臣た

ちや世子（王の跡継）であった 8 男の芳碩（バンソク）らを暗殺した第一次王子の乱が関係する。事件後太祖は譲位し、芳果（バンカ）が 2 代目の定宗となったが、芳遠は丞相として実権を掌握、その後 3 代目の太宗として王に即位した。太宗は父の〝承諾〟を受けたくて咸興に差使を送り続けたが、太祖はこうしたいきさつを快く思っていなかったのであろう。

こうした波瀾万丈の李朝初期であるから、よくドラマの題材にとりあげられる。これまで韓国で放映されたものに、「龍の涙」（1996 ～ 1998 年）、「鄭道伝」（2014 年）、「イニョプの道」（2014 ～ 2015 年）、「六龍が飛ぶ」（2015 ～ 2016 年）、「私の国」（2019 年）などがある。（カッコ内はドラマ制作年）

このなかの「イニョプの道」には、主人公であるイニョプの父親が咸興差使として咸興に送られるというエピソードがでてくるそうだ。物語は両班の娘であったイニョプの父親が、反逆罪の汚名を着せられたため奴婢になり、そこから苦労してはい上がっていくというもの。私はこのドラマを見たはずなのに、咸興差使のエピソードの部分はまったく思い出せない。

もう一つ、トゥムンプルチュル（두문불출＝杜門不出）、すなわち家に閉じこもって出てこないことを示す四字熟語も韓国（朝鮮）独自のものである。しかも李成桂（イ ソンゲ）＝太祖のエピソードがからんでいる。

李成桂が高麗を滅ぼして朝鮮王朝を開国したとき、高麗王朝の官僚たちが職を辞して杜門洞という所に蟄居した。太祖は彼らを新王朝の官職につけようとしたが、彼らは旧王朝への忠誠心から応じず、怒った太祖は一か所だけ逃げ口を作って杜門洞に火を放つが、彼らは最期まで村から出てこなかったという。

そのほかドラマなどでよく使われる賊反荷杖（チョクパンハジャン＝적반하장、盗人猛々しいに近い意）や、門前沃畓（ムンジョンヨクタプ＝문전옥답、屋敷の前に肥沃な田があり裕福なこと）なども朝鮮独自の四字熟語だそうだ。なお、田や水田を表す「畓（タプ）」は固有語を表記するために作られた韓字？。

ウップダ（웃프다）

ウッタ（웃다＝笑う）とスルプダ（슬프다＝悲しい）を合成した言葉で、可笑しいけれどなんだか悲しいといった感情を表現する。日本語にも「泣き笑い」という似たような表現があるが、韓国語の表現の方がこまやかな感情を表しているように思える。

同じような合成語でシウォンソプソッハダ（시원섭섭하다）という表現もある。すっきりしたという意味のシウォナダ（시원하다）と、なごり惜しいという意味のソプソッパダ（섭섭하다）の合成語で、続けてきた大仕事が終わってホッとしたときに感じる「すっきりするけどなんだかなごり惜しい」といった感情を表現する。

日本語に「甘辛い」という表現があるように、韓国語の味覚表現にも異なる味覚表現を組み合わせたものがある。たとえば甘酸っぱいはセコムタルコム（새콤달콤）、酸っぱくて渋いはシグムトルトルハダ（시금털털하다）など。

ヒマンゴムン（희망고문＝希望拷問）という熟語がある。希望と拷問とは正反対のようなニュアンスをもつ言葉だ。それを組み合わせたヒマンゴムンは、できないのが分かっているにも関わらず、相手に希望を与えて苦しめることを意味するという。

ほかにもこうした表現はあるだろうか。